

平和富士



多治見市立平和中学校 学校報 令和3年1月号

こんなこともできると気づかされました！

校長 原 直樹

コロナ禍の状況が収まらないまま年を越すことになりそうです。それどころか、3月から5月まで学校が休校状態だったあの頃より、さらに事態は深刻です。学校では引き続き、できる限りの感染予防を行って教育活動を進めております。

そんな中、コロナのせいでできないことがたくさんありましたが、コロナのお陰で改めて気づかされたり、新しい発想が生まれたりしたことも事実です。私は、長い間教員を続けてきて、学校で行う生徒の活動は、「みんながそろって同じことをやる」というのが一つの強い規準になっていて、「個が自らの発想で行ったり、それを認め合ったりする」活動は、学校にはそぐわないものだと決めつけていたことに気づかされました。それは、最近、文化委員会が主催して行っている「昼休みの文化発表会」を見たからです。

文化発表会は、各自が自ら取り組んできたことや、日頃考えていることを発表するものです。これまで行われた発表は次のような内容でした。

- 12/10 (木) 吹奏楽部 「パーカッション」
- 12/11 (金) Aさん 「台湾の歌」
- 12/14 (月) 吹奏楽部 「金管楽器4重奏」
- 12/15 (火) BさんとCさん 「ピアノとサクスのコラボ」
- 12/17 (木) 吹奏楽部 「サクス」

観客は全校生徒が必ず全員参加ということではなく、観たい生徒が観に行くというスタイルです。それでも、1年生から3年生まで、かなり多くの生徒が会場に集まりました。もちろん、コロナのことがあるので、3密を避ける配慮もして行いました。

発表した生徒たちは、どの子もとても輝いていました。自分の意志で、自分の努力で地道に取り組んできたことを披露する場でもあり、自分の気持ちや考えをみんなにわかってほしいと主張する場でもあります。例えば、3年のAさんの発表では、「僕のお母さんは台湾の出身です。台湾の素晴らしさや日本との違いを多くの人にわかってもらいたくて今日の発表をしました。」と彼は語りました。彼の歌と語り、体育館の空気を、温かく広い心でいっぱいになったような瞬間となりました。台湾を誇りに思う彼の強い意志も伝わってきました。BさんとCさんのジャズ演奏は、中3のレベルを遙かに超えていました。音楽素人の私にも、本物のジャズの魂が響いてきました。音楽と共に生きている彼らの心意気を感じました。

どの発表にも、観客の生徒たちの温かい眼差しと、自然に湧き出る拍手がありました。前に出て発表する平中生、それを包み込む観客の平中生、その両者が共に素敵でした。

コロナがない今までの学校で、当たり前のように行ってきた体育祭や合唱祭、または修学旅行などの行事にも、それぞれにももちろん価値があります。こういう行事では、「一人でもかけたら意味がない」なんていう言葉掛けをしてきたものです。それが本当によかったのか？波に乗って頑張れた子にとっては一生の宝物となった行事。しかし、その波に乗れない子にとっては心にプレッシャーのかかることだったりもします。しかし、この文化発表会は、必ずしも全員が同じでなくても、それぞれにやりたいことをやればよいし、結果的に文化的価値も高く、人間の生き様を見せ合って認め合うという会となっていることが素晴らしいと思います。こうでなければいけないという固定観念に縛られてばかりではいけない。私は学校という場所でも、こんなこともできるのかと気づかされました！